

## 藤田貞一郎先生を偲んで

廣田 誠

藤田貞一郎先生が逝去された。本誌『経済史研究』に藤田先生は、論稿として「近代日本における「営業の自由」観―基礎史料発掘の試み―」（第五号、二〇〇一年）、また「歴史随想」として「世紀末」に寄せて」（第二号、一九九八年）と「訓詁学再考」（第一四号、二〇〇一年）、「支那事变」から「大東亞戦争へ」（第一七号、二〇〇四年）、さらに書評として「瀨瀬厚著『日本降伏―迷走する戦争指導の果てに―』」（第一八号、二〇〇五年）、加えて「石井寛治教授による書評へのリプライ」（第八号、二〇〇四年）を、それぞれ執筆された。また藤田先生の御著書に対し小室正紀氏が『国益思想の系譜と展開―徳川期から明治期への歩み―』（第四号、二〇〇〇年）、石井寛治氏が『近代日本経済史研究の新視角―国益思想・市場・同業組合・ロビンソン漂流記―』（第八号、二〇〇四年）、川口浩氏が『領政改革』概念の提唱―訓詁学再考』（第一六号、二〇一三年）についての書評をそれぞれ執筆された。このほか『経済史研究』の刊行主体である日本経済史研究所の開所七〇周年記念論文集『経済史再考』（徳永光俊・本多三郎編、思文閣出版、二〇〇三年）に藤田先生は「暴利取締令と「営業の自由」観―大正期の一事例―」を執筆されている。

このように藤田先生とのかかわりがきわめて深い本誌『経済史研究』に、学部や大学院のゼミナールにおいて藤

田先生のご指導を賜った所謂弟子ではない私が、藤田先生に關して一文をものするとははなはだ恐縮ではあるが、私が大学院に進学し研究者としての道を選んで以来、学部ゼミと大学院の先輩であり、また私が研究テーマとした市場史研究の開拓者でもある藤田先生からは、公私にわたり数多のご指導を賜った。その御恩にいささかなりとも報い、また先生の御霊に捧げるため、本稿では藤田先生の研究者としての足跡を振り返るとともに、若干のエピソードをご紹介します。

#### 〈藤田先生のご足跡〉

藤田貞一郎先生は一九三四年平壤府（朝鮮）でお生まれになり、鴨緑江岸の新義州府で成長された。自ら綴られたところによれば、藤田先生は「腺病質体質で「三日にあげず熱を出し」病院通いに明け暮れ」る幼少年期をおくられた。その後健康は取り戻されたものの、終戦後の一九四六年秋、「蜿々と続く引揚者の群れの一員として夜に日をついで歩き、鎮南浦のはるか南の名も知らぬ峠で三十八度線を越える」という過酷な体験の末、引揚げを果たされた。

長じて和歌山大学経済学部に入學された藤田先生は、安藤精一先生のゼミナールに屬し、太閤検地をテーマとして

卒業論文にとりくむうちに大学院への進學を志された。安藤先生のアドバイスもあり、一九五八年藤田先生は大阪大学大学院経済学研究科に進學され、宮本又次先生のご指導を仰ぐこととなった。大学院時代の藤田先生は、膨大な鴻池善右衛門家史料の分析に取り組まれ、これにより「こちたき議論はさておいて、何よりも一次史料に取りかかる」という宮本先生の學風を、知らず知らずのうちに学ばれた。修士論文は「鴻池新田の經營的性格」であった。

また阪大大学院在籍中に藤田先生は、和歌山藩の御仕入方に関する論文「幕藩体制社会後期における紀州藩の經濟政策」を執筆され、これは宮本又次先生編の『藩社会の研究』（ミネルヴァ書房、一九六〇年）に収録された。この論文の執筆過程で藤田先生がその重要性に注目された国益思想は、「大名領知經濟の自立化」を象徴するものとして終生「一時も脳裡を離れることのない」問題意識となった。またのちに藤田先生の新たな研究領域となった市場史研究の出発点は、この大学院時代に、大阪市中央卸売市場の歴史編纂を宮本又次先生が引き受けられ、そのお手伝いをされたことであった。

その後藤田先生は、一九六三年から一九六八年、松山商

科大学経済学部で講師、助教授として勤務された。この間一九六六年に初の御著書『近世経済思想の研究―「国益」思想と幕藩体制―』（吉川弘文館）を刊行され、また翌年には経済学博士を大阪大学より授与された。その後一九六八年から二〇〇五年までは、同志社大学商学部で助教授、教授として勤務された。同志社大学に御勤務の間、一九七二年に『近代生鮮食料品市場の史的研究―中央卸売市場をめぐって―』（清文堂出版）を、また一九九五年には『近代日本同業組合史論』（清文堂出版）を刊行された。

#### 〈藤田先生の研究姿勢〉

藤田先生は還暦の年に刊行された『近代日本同業組合史論』の「あとがき」で、宮本又次先生と安藤精一先生の両恩師について「宮本先生は七〇歳代の御研究を八〇歳にお成りの頃、『住友家の家訓と金融史の研究』（同文館）、安藤先生は六〇歳代の御研究を七〇歳にお成りの頃、『近世公害史の研究』（吉川弘文館）、という名著におまとめになった。いずれも、両先生の学者人生の蓄積の上に立って新境地を開拓なさった創造力あふれる書物である。」と述べられた上で、「宮本・安藤両教授にあやかり六〇歳代にも何かまとめたいと考えてはいるのだが、どうなるやら。」

と控えめに希望を語られた。しかしその後、藤田先生は一九九八年に『国益思想の系譜と展開―徳川期から明治期への歩み』（清文堂出版）、二〇〇三年に『近代日本経済史研究の新視角―国益思想・市場・同業組合・ロビンソン漂流記―』（清文堂出版）、また同志社大学商学部を退職されたのちの二〇一一年には『領政改革』概念の提唱 訓詁学再考』（清文堂出版）と、精力的に御著書を刊行され、自らの誓いを現実のものとした。

常に新たな視角から問題を提起される藤田先生のご研究に対し、多くの研究者は批判ではなく黙殺という形でこたえた。藤田先生が長期間にわたり多数の論文を執筆され、またそれらをご著書にまとめられたのは、こうした学界のありかたに対し異議を唱え続ける必要を痛感しておられたからであろう。藤田先生は常に鞆の中へ幾冊かのさまざまな分野にわたる書物（その多くは外国語の文献）を入れて持ち歩かれ、これらを読んでおられた。藤田先生の多岐な分野にわたる独創的なご研究は、こうした膨大な文献の読破により得た鋭い問題意識が、幅広く涉猟された史料による徹底した実証と結び付き、生み出されたものであった。藤田先生は「興味を持ち出したら続けることが大事だな。続

けることは本当に大事。続けたからこそ、僕の国益研究がそれなりに意味を持ったんだと思う。そんな歴史の資料なんて、いつべんに全部出てくるはずはないからな。ぼちぼち出てきて、あるいは人が教えてくれて、それを自分なりに消化して体系化するというもんだろうな。そういう気がしますね。」と語られ、一つのテーマを継続して追及することの大切さを強調された。

#### 〈藤田先生と市場史研究会〉

また『近代生鮮食品市場の史的的研究』により市場史という経済史研究の新たな領域を開拓された藤田先生は、一九八四年一月発足の「市場史研究会」で初代代表に就任され、一九九四年六月までの長きにわたり、初代の事務局世話人であった中村勝氏とともに同研究会の基盤を確立された。この研究会がわが国における市場史研究の進展におよぼした影響は誠に大きく、以後多数の研究者の参加を得て市場史研究は量的・質的に拡大した。

市場史研究の進展を示す一つの出来事として、一九八七年同志社大学において開催された社会経済史学会第五六回全国大会がある。このとき藤田先生はオーガナイザーとして市場史研究会のメンバーを結集し、共通論題報告「産業

革命と国内流通機構―日本とイギリスの比較市場史―」を組織され、産業革命に対応して生じる国内商業、とりわけ生鮮食品市場を中心とする日用品流通機構の変革・再編を「市場革命」と名付け、経済史研究における不可欠の研究分野として位置づけることを提案された。

代表を退かれる前年の一九九三年、藤田先生は市場史研究会の会誌『市場史研究』第一三号の編集後記で、会員数が一八〇名を超えた同研究会について「真理は必ずしも多数決ならず」とする学問的論理を貫徹するためには、自由な研究と発言の場を確保させ得る程の会員の支持が絶対不可欠である」と、市場史研究の発展と研究会の着実な成長に喜びを率直にあらわされた。

#### 〈藤田先生と酒席〉

ところで藤田先生と言えば、お酒をこよなく愛されたこととはつとに知られている。また藤田先生にとってのお酒が、たんなる嗜好品の域を超えて、新たな研究にとりくまれるためのエネルギー源となっていたことは、先生を知る多くの人が認めるところであろう。私はまったくの下戸であるが、しばしば藤田先生の酒席にお供させていただいた。宴も終わりに近付くころ、決まって藤田先生は銚子を一本注

文され、「僕はこれで卒業するから」と言われた。最後の一本を楽しまれることを「卒業」と表現されたことからわかるように、藤田先生の酒席は終始なごやかであった。また先生はお酒を好まれるだけでなく、甘いものもお好きで、酒席の後に席を移した喫茶店では、アイスクリームを注文されるのが常であった。

二二世紀に入って間もなくの一時期、市場史研究会のメンバーで申請を繰り返した末に交付を受けた科研費を用いて、藤田先生のお供で東京都立中央図書館に足しげく通い、史料収集に励んだことがあった。昼休みには同図書館内の食堂を利用するのが常であったが、その際藤田先生が好んで注文されたのはスキヤキ丼で、また藤田先生はこの食堂のシェフが、江戸前の端切れのよい口調でてきばきと注文をさばくさまを高く評価しておられた。しかし二〇一五年現在、この食堂はリニューアルされ、メニューが大幅に削減されたため、スキヤキ丼は姿を消した。またセルフサービス導入で名物シェフも去った。私は現在も上京のおり史料を求めて同図書館に足を運ぶが、その食堂で藤田先生の面影を偲ぶことはもはやできないのである。

〔付記〕 本稿を執筆するにあたり、藤田貞一郎先生の御著書とともに、以下の文献を参照した。

藤田貞一郎「いと恥ずかしきことなど」(藤田貞一郎・宇田正編『宮本又次史学館』思文閣出版、一九八四年、所収)

藤田貞一郎「編集後記」『市場史研究』第一三号、一九九四年

藤田貞一郎「イエーリング読書会」(勝山欣哉・藤田貞一郎・高嶋雅明編『藤かずら 和歌山大学 経済学部安藤ゼミ 卒業生の軌跡』(藤会(安藤ゼミ卒業生の会)発行、宇治書店発売、二〇〇一年)所収)

宇佐美英機・原田政美「藤田貞一郎先生のご研究」(安藤精一・藤田貞一郎編『市場と経営の歴史―近世から近代への歩み―』清文堂出版、一九九六年、所収)

「藤田貞一郎先生インタビュー」(聞き手・廣田誠、長廣利崇)(経営史学会編『経営史学の歩みを聴く』文眞堂、二〇一四年、所収)

(ひろた まこと・大阪大学大学院経済学研究科教授)

